

ドキュメンタリー映画 「太陽が落ちた日」

アヤ・ドメニック監督から

乳歯保存ネットワークへのメッセージ



祖私の祖父・土井茂は、第2次世界大戦当時、広島赤十字病院に勤務する若い医師でした。1945年8月6日、米国が広島に原爆を投下したあの朝、祖父はいつもの週と同じように病院へ出勤するため、疎開していた地方の実家から列車で広島市へ向かっていました。祖父が広島市から実家に戻ってきたのは、それから10日後のことでした。その後、祖父は、あのときヒロシマで何を目撃し何を体験したのか、自らの体験について一言も語ろうとはしませんでした。

私のドキュメンタリー映画「太陽が落ちた日」で、私は、祖父の過去へと旅を始めます。私が映画の撮影を開始したのは2010年の4月ですが、これはフクシマ大惨事発生の1年前です。あの時、スイスのテレビで、福島第一原発の原子力施設が爆発する様子を見た私は、歴史が繰り返されるのを目撃しているかのように感じました。しかし、その時点では、まだ、どういった意味で歴史が繰り返されているのか、私には分かりませんでした。ただ、そう漠然と感じたのです。

その後、自分で詳しく調べ研究し、映画の主人公である肥田舜太郎医師、内田千寿子さんそして祖母と多くの時間を過ごし、社会や政治が、この新たなフクシマ大惨事にどのように対処しているのかを観察する中で、私は、”歴史の繰り返し”がどこにあるのかをより深く認識するようになりました：私に強くヒロシマを思い起こさせたことがあります。それは、フクシマでもヒロシマのように、放射線によってもたらされる真の影響について沈黙され、その沈黙が保たれているということです。過去そして現在において、政治だけが真実を圧殺しようとしているではありません。かなり大多数の市民も同様に、緊急問題から顔を背けて、いわゆる普通の生活に逃げ込むことを選んでいのです。忘れようとし、これまで通り生活を続けていこうとするのは極めて人間的で、よく理解できる習性でもあります。

しかし、私の映画の主人公たちが、私たちそれぞれが責任を持つことの大切さを教えてくれました。政治家を責めるだけではなく、一人ひとりの市民が、私たちの子どもたち、そして孫たちのために、より安全な未来を求めて闘うべきです。

私が心から乳歯保存ネットワークを支持するのは、そうした理由からであり、日本における放射能汚染の実態を評価するのに役立つデータを収集するととても重要な事業だからです。フクシマ原子力災害の影響を受けた日本の市民が被曝し、その結果病気になったと将来証明するデータを手にするという事は、何よりも重要です。広島の被爆者の多くは、そうした証拠がなく、当局により認知されず、無視され、亡くなっていきました。少なくとも、このような悲劇は繰り返されるべきではありません！

2017年6月4日 アヤ・ドメニック

「太陽が落ちた日」ディレクター

(和訳：グローガー理恵)